（学位第３号様式）

学 位 論 文 要 旨

氏　名	高梨子　文恵
題　目	ベトナム紅河デルタにおける市場経済化と共同体を基盤とした農民の対応に関する研究 (Adoption of Market Oriented Economy and Communal Respondence of Peasant in Red River Delta, Vietnam)

本研究が対象とする紅河デルタでは、伝統的に平等で相互扶助的な社会が形成されてきた。ドイモイ政策によってこれとは全く異なる競争が源泉の「市場」が社会に組み込まれることになったが、農民はこれらを上手くすり合わせることによって新しい社会を作り上げている。本研究は、共同体的な慣習経済の中にある農民がどのように市場経済化に対応してきたかを明らかにするものである。具体的には、社会的、自然的条件の異なる紅河デルタの 3 農村で調査を行い、それぞれの地域における市場と共同体を統合する主体の違いに着目し、そこでの統合のあり方と課題を明らかにし、最後に紅河デルタ農村の経済発展の方向を展望している。

本論文の構成は以下の通りである。まず第 1 章では、ベトナムにおける経済政策の推移を明らかにし、現在の農業、農村部門の課題を既存研究から明らかにした。続く第 2 章では、紅河デルタの農業と社会に着いて述べている。紅河デルタの地理的条件と、農業の歴史的発展過程、村落・家族・土地制度について既存研究から見た。また、歴史が移り変わる中で村落共同体がどのように変化し、その時々の国家・市場・共同体の統合のあり方を考察し、紅河デルタにおける共同体を基盤とした経済発展の重要性を明らかにした。3、4、5 章は調査研究から得られた結果をまとめている。第 3 章では、外国直接投資の増加によって工場が増設されている地域に隣接する Gia Hoa 社を例に、労働市場が農村部に浸透している地域における地域農業としての市場経済化対応を明らかにした。Gia Hoa 社では村（thon）や婦人会など共同体的性格を持つ組織が複数存在するが、どれも地域全体をまとめる力とはならず、農業経営は一部の市場条件の良い農家が個別対応的に発展してきていることが明らかとなった。第 4 章では、同様に都市近郊にありながら、急速に産地として成長している Doan Thuong 社を事例に、商品作物生産と共同体の関係について考察した。ここでは、社会的資本を有する幾つかの農家が、村全体の農産物市場流通の発展に寄与してきたことを明らかになった。第 5 章では、紅河デルタの中でも比較的市場遠隔地に位置する Nam Cuong 農協を事例に、農協が中心となって経営集約化によって商品作物生産を導入し、地域全体の農業生産性向上に努めていることを明らかにした。最後の第 6 章では、全体を総括し、展望を述べている。

(学位第３号様式)

学 位 論 文 要 旨

氏　名	TAKANASHI FUMIE
題　目	Adoption of Market Oriented Economy and Communal Respondence of Peasant in Red River Delta, Vietnam (ベトナム紅河デルタにおける市場経済化と共同体を基盤とした農民の対応に関する研究)

In Red River Delta, peasant's life was based on the mutual aid, the mechanism called "subsistence-economy" and relatively equal society was kept in each village. But after Doi Moi policy started, Market oriented economy edged into these traditional society. This thesis devoted to show how the peasant took the initiative adopting these two conflicting mechanism in their daily life. In particular, 3 different villages were chosen to make field research and I focused on the difference of entities that integrate 2 different economy systems, and analyzed how they integrate communal economy, subsistence economy, and market oriented economy.

This thesis was composed by 5 chapters. The initial chapter addressed the changing of economic policy of Vietnam and the currant problems of agriculture and rural area. The Second chapter was an effort to describe the agriculture and rural society in Red River Delta. Geographic condition, agricultural development process, institutional situation of village, family, and land use were reviewed from previous works. Besides I tried to illustrate how the village community was changed through history and how peasant integrate Nation, Market and Community, then the importance of the community on the economical development was emphasized. Chapter 3, 4 and 5 were based on my field research and represented an effort to apply these argument to the economical development. Chapter 3 described the despondence of peasants in Gia Hoa Village, where the labor market penetrated deeply because that is near by the industrial area. Gia Hoa village had some mutual aid community as "Thon" or woman's union, but rural agricultural development was depend on individual method because these groups could not bundle whole village. Chapter 4 shows the relationship between agricultural product distribution and rural community in Doan Thuong village. The distribution of agricultural products of this village was based on the social capital of a few villager and they contributed to the agricultural development in the whole village. Chapter 5 analyzed the role of agricultural cooperative to rural agricultural development. Contract farming adopted by Nam Cuong agricultural cooperative into traditional farming system was effective for improvement of productivity on the village. In the last chapter I summarize this whole thesis and conclusion was given.

（学位第９号様式）

No. 1

学位論文審査結果の要旨

学位申請者 氏　　名	高梨子　文恵		
審査委員	主査	鹿児島大学　教授	岩元　泉
	副査	鹿児島大学　教授	田代　正一
	副査	佐賀大学　教授	白武　義治
	副査	鹿児島大学　教授	秋山　邦裕
	副査	琉球大学　教授	仲地　宗俊
審査協力者			
題　　目	ベトナム紅河デルタにおける市場経済化と共同体を基盤とした農民の対応に関する研究 (Adoption of Market Oriented Economy and Communal Respondence of Peasant in Red River Delta, Vietnam)		

ベトナムは社会主義体制を維持したまま、市場経済を導入した経済移行国の一つであるが、社会基盤にアジアモンスーン地域の稲作経済構造に共通した共同体を色濃く残しているために、市場経済の浸透は共同体との相互作用の影響を大きく受け、その態様は東欧諸国や中国とも異なっている。

本研究は、ベトナム紅河デルタ地帯における野菜作を中心とした市場経済化のプロセスにおいて、共同体を基盤とした販売農民の対応を三つの典型的事例を調査し、市場経済が典型的な個の行動原理をもとにした西欧合理主義的対応ではなく、それぞれの共同体的基盤の上に立った互酬的な相互扶助的対応によって、異なった市場組織と主体を形成していることを、明らかにしたものである。

本論文ではまず、1945年独立以降のベトナム経済政策の推移をたどったあと、紅河デルタの開発過程と、村落・家族・土地制度など共同体を構成する諸制度の歴史的形成過程を既存研究を検討することによって明らかにした。封建制時代に形成された共同体的諸制度は、フランス植民地下やその後の共産党政権下の集団農場体制の下でも、形を変容させながらも村

落的結合関係として生き続けており、それがドイモイ政策以降の市場経済導入の以後も、社会構造として経済活動に作用しているという仮説を立てた。

その上で、紅河デルタ農村において、近年外国投資の導入によって工業が進出してきた地域において、兼業化が進展する中で、規模拡大する野菜専作農家と自給的生産農家に分化しているが、農地流動化は共同体の範囲内で、共有地の競売によって上層農に土地が集積する構造が形成されていることを明らかにした。

次に、ハイズン省のザーロック県ドアンチュオン社では近年野菜作が急速に拡大しているが、それには村内集荷商人の役割が大きいことが明らかとなった。これらの商人は、もともとは近隣市場への出荷商人であったが、野菜の南部中部都市への広域移出が進展するに伴って、大量に野菜を扱う専業的な移出商人と北部都市に主にスイカを出荷する集荷商人への機能分化が起こっている。さらに農家と商人、商人間の取引は村落内での情報の共有化を伴った固定的な取引関係であり、流通の効率化をもたらしていることが分かった。このような村落内の共同体的関係に基づく経済活動が、村落内で完結しつつ、野菜産地形成に大きく作用していることを明らかにした。

さらに、紅河デルタでも市場遠隔地に属するナムディン省ナムコン農協の事例では、行政、企業、農協の連携関係によって、契約生産による産地形成が行われ、農協は、契約締結、生産資材供給、決済代行などで積極的な役割を果たしている。その結果、農家は経営を多角化し、土地利用集約度を向上させ、所得を大きく増加させるという成果を上げている。旧型農協であるナムコン農協は、手数料収入から得た収益を水路整備、種苗保管庫の設置など産地基盤整備に再投資しており、産地形成に極めて重要な役割を果たしていることを明らかにした。本研究では、ナムコン農協が合作社時代の生産隊体制を維持し、地域農民に貢献する立場を維持するという伝統的共同体理念に基づく行動様式を取っていることを立証した。

以上のように、本研究では、ベトナム紅河デルタにおける市場経済の浸透は、ストレートに市場原理が貫徹するのではなく、共同体的基盤をもった農民の行動様式を通じて、互恵的・相互扶助的な機能を保ちつつ進展していることを明らかにしており、移行期経済における市場経済の浸透法則の原理を明らかにした貴重な研究成果である。本研究成果は、モンスーンアジアに共通の村落共同体が資本主義経済に与える影響についても示唆を与えており、新たな知見を加えたものであると評価できる。したがって、本研究は博士（農学）の学位を与えるに十分な内容を有するものと認められた。

（学位第１０号様式）

No. 1

最終試験結果の要旨

学位申請者 氏　　名	高梨子　文恵		
審査委員	主査	鹿児島大学　教授	岩元　泉
	副査	鹿児島大学　教授	田代　正一
	副査	佐賀大学　教授	白武　義治
	副査	鹿児島大学　教授	秋山　邦裕
	副査	琉球大学　教授	仲地　宗俊
審査協力者			
実施年月日	平成２１年　１月１０日		
試験方法（該当のものを○で囲むこと。）			口答・筆答

主査及び副査は、平成21年1月10日の公開審査会において学位申請者に対して、学位申請論文の内容について説明を求め、関連事項について試問を行った。具体的には別紙のような質疑応答がなされ、いずれも満足できる回答を得ることができた。

以上の結果から、審査委員会は申請者が博士（農学）の学位を受けるに必要かつ十分な学力ならびに識見を有すると認めた。

学位申請者 氏　　名	高梨子　文恵

Q1.共同体を説明するときには水田稲作を取り上げ、市場経済化については野菜を対象としているが、その理由はなにか？。

A1.紅河デルタでの市場対応が、野菜を中心として行われているため、最重要と考えた。

Q2.村内集荷商人の性格をもう少し詳しく。例えば出自や系譜、村の中での存在はどうなっているか？

A2.商人への参入障壁は高くなく、信頼があって、資本がある人なら誰でも従事できる状況にある。代々商人という家はない。集団化時代になくなったものと思われる。

Q3.共同体の説明の時、イエ、ムラ概念を使っているが、これは特殊日本的用語であり、ベトナムのムラに当てはめるのはどうか？

A3.確かにそうだが、ベトナムの共同体をどのように特徴づけるかは、別途追求すべき課題だと思う。

Q4.対象をなぜベトナム紅河デルタにしたのか？

A4.社会主義体制で市場経済を導入したという特殊事例であったので、関心があった。

Q5.家族経営を伝統的な仕組みが支えているということだったが、労働市場が発展し、広域市場化することで、変容しているのではないか？

A5.確かに事例２では広域流通対応しており、共同体の維持が確認できていないので結論との不一致があるが、村落内商人の行動様式に共同体的対応がみられた。

Q6.自家労賃が上昇といっているが、これはどういう意味か？　家族労働は市場化していないと思うが。

A6.曖昧に使ってしまった。機会費用的な意味である。

Q7.共同体の意味をもう少し厳密に、ここで使っている共同体を地縁集団、属地集団と置き換えてもよいか、機能的集団との関係を明確にしてほしい。

A7.地縁集団がないと機能集団がうまく機能しないとか、機能集団が地縁集団を利用するという関係は確認できなかった。

Q8.共同体は一般には市場化対応の中で阻害要因になっているのでは？

A8.一般にはそうだが、紅河デルタでは市場経済に共同体的対応がみられることを明らかにしたかった。

Q9.ここでの事例が、特殊なのか、一般的なのか？

A9.それを明らかにするのは、（大量調査を必要とし）非常に困難である。

Q10.土地の競売、賃貸借は余剰がある農家が得ているということか？

A10.そうではなく、賃貸借は親戚間で行われるので、上層農は競売で農地を手に入れるしかないということである。

Q11.三つの事例を共同体維持ということで共通点を見ているが、むしろ分けた方がよいのではないか？

A11.それは今後の課題としたい。

Q12.上層農家という表現を使っているが、これは発展的なものという位置づけか？

A12.機械的に粗収入の多いものを区別したので、便宜的な位置づけである。

Q13.第３事例の協同組合は、官製の農協か、自発的な農協か？

A13.旧合作社を引きついでおり、生産隊が維持されている。共同体を基盤に作られた組織であるといえる。

Q14.工芸作物の場合の発展とは異なっていると思うので、それとの比較を行って見たらどうか？

A14.確かにその通りだと推測されるが、今後の課題としたい。

Q15.伝統工芸は調査地ではなかったのか？

A15.調査地ではみられなかった。